

## 回想 岡本道雄先生を偲んで

樽 本 裕 見 子

岡本先生が天に召されてちょうど一年が過ぎようとしていた二月の末、上ヶ原のご自宅に奥様をお訪ねした。お孫さんの初節句が美しく飾られたひな人形と、ニッコリ笑った先生のお写真に迎えられた私は、奥様のお話を伺いながら、学生時代から二十年にわたり公私ともにお世話になった在りし日の先生に、しばし思いをはせた。



中庭がよく見える図書館本館一階の岡本研究室。ここは私が、大学三年四年の二年間、ゼミの仲間五人と貴重な時間を過ごした思い出の場所だ。エリクソンの『幼児期と社会』(Childhood and Society)やデューイの『学校と社会』(The School and Society)などを題材に、ゼミはいつもにぎやかに時が過ぎた。年に一度ゼミ旅行にも出かけた。そういう時は先生もリラックスされて、私たちと一緒にトランプや当時流行っていたオセロゲームなどに興じられた。でもこれがなかなかの難物で、先生に勝利の女神が微笑まないとお顔がだんだ

ん曇ってくる。もちろん学生たちも真剣勝負。勝たせてさしあげるなんてことは全く考えないので、常にもう一回、もう一回と勝負は深夜にまで及んだ。

先生は、よく講義の合間に女学院にまつわる色々なお話をしてくださった。山本通時代のこと、昔の卒業生の方々のこと、デフォレスト先生の思い出、向かいの研究室におられた神谷美恵子先生のこと、「建物が教育する」というヴォーリズの熱い想いが込められた岡田山の美しい建物のこと……。先生から伺う女学院の歴史には、女性の生き方のモデルがたくさんあり、ずっと公立育ちの私にはとても新鮮で興味深かった。ゼミや専門の授業を通して、大学で学ぶということを教えていただいたのは言うまでもないが、それ以上に、私は女学院に対する愛情を、先生のお話から育てることができたことが幸せだったと思う。

院長ご在任中の先生は、大学学長を兼任しておられた時期もあり、非常にご多忙な毎日だった。学内での会議や授業のほかには原稿や講演の依頼も多く、私立大学連盟やキリスト教学校教育同盟、ユネスコ、YMCAなど責任ある外部の仕事もたくさん抱えておられた。それでも時間がある時には、秘書室の定位置に腰をおろされてよく談笑された。初めは私たちの他愛ない話を聞いておられるのだが、お話好きな先生のこと、気がつくといつも私たちを相手に、女学院の歴史や日米比較教育論の講義が始まっていた。

先生はよく「初めて岡田山に上った時から女学院に魅せられた」とおっしゃっておられたが、本当に女学院がお好きだった。「でもぼくはどんなにがんばっても同窓生にはなれないもんな」とおっしゃって笑っておられたこともあった。女学院の今について、また将来について熱っぽく語られるその言葉の端々から、女学院に対する深い愛情と誇り、そして高い理想を感じた。移り行く時代の中で、女学院の将来のため今何をするべきかを常に考えておられたが、なかなか思うように進まないことも多々あったのだろう、院長の任期を終えられるころには、考え込まれたり、

時折ふつとお寂しそうな表情が浮かぶこともあった。一七年にわたる院長、学長職を終えられたあと、心臓の大手術から再びお元気になられた先生は、女学院とも関係の深かった松山東雲学園からの要請をお受けになり、ご定年まであと三年を残して、松山東雲女子大学の初代学長にご転出になられた。

先生は折にふれ、ラインホルド・ニーバーのあの有名な祈りを引き合いに出された。

神よ、変えることのできない事柄については冷静に受け入れる恵みを、変えるべき事柄については変える勇気を、そして、それら二つを見分ける知恵をわれらに与えたまえ。

女学院にとつて変えることのできない建学の精神「愛神愛隣」に示されるキリスト教精神と、これに基づく人格主義教育の伝統を守り、新しく変えるべきものは、祈りと勇気をもつて改めていかなければならないと、先生はおつしやりたかったのだらう。神戸女学院は来年創立一二五周年を迎える。その女学院の次の時代のため、私たちもたえず祈り、英知を集め決断し、歩んで行く努力をしなければならぬと思う。

昨年二月二十六日、松山教会で行われた告別式のあとしばらくして、松山東雲学園理事長の松野 明先生から、院長の城崎先生に一通のお手紙が届いた。告別式列席に対する感謝のあと、お手紙は次のように続いていた。

亡くなられるまで岡本先生の神戸女学院に対する愛着は深く、今は城崎先生のもと、女学院が災害からの復旧を果たされ、また見事な発展を続けておられることを喜んでおられました。

身体はどこにあつても、心の中ではやっぱり女学院のことをいつも気になさつておられたのだなと思うと、胸がいっぱいになった。



故岡本道雄名誉教授追悼礼拝

きつと今も天上で、敬愛されていた元史料室長の渡辺久雄先生や、古い時代のお話をよくご一緒になさった元図書館事務長の山下薫子さんたちと、岡田山ファミリーの同窓会をしながら、女学院の話題に花を咲かせておられることだろう。

(神戸女学院大学・九七回生 院長秘書)

#### 故岡本道雄先生略歴

お生まれは一九二九年五月十五日。同年、幼児受洗、一九五四年六月、京都教会にて堅信礼。

京都大学教育学部、同大学院での勉学を卒え、京都大学教育学部助手を経て、一九六〇年に神戸女学院大学文学部社会科学科に着任。

神戸女学院大学文学部社会科学科主任(一九七〇年―一九七一年)、教務部長(一九七一年―一九七二年)を歴任し、一九七二年に大学学長に選任された。一九七五年、小宮孝院長の急逝により院長代行・理事を兼任。一九七七年から一九八八年まで院長職に専従された。

神戸女学院創立百周年に際しては「神戸女学院百年史 各論」の編集委員長となり、自ら原稿も執筆、「日本近代女子教育と神戸女学院」なる大論考をものされた。また、神戸女学院史料室の誕生、『学院史料』の刊行にも指導と援護をお与え下さった。

一九九二年、松山東雲女子大学からの要請を受けて、同大学学長に就任される。

一九九八年二月二十四日、現職で急逝。松山教会において葬儀。神戸女学院では四月二十二日に故岡本道雄名誉教授追悼礼拝を行なって、先生の在りし日を偲び、天上の平安を祈った。会場には社会学科時代の同僚・後輩になる諸先生方多数のお姿が見受けられた。